

## 『浜松文芸館』リニューアルオープン

鹿谷町の『浜松文芸館』が3月末で幕を閉じ、4月1日から、『新しい浜松文芸館』がクリエート浜松内にオープンしました。

5階に展示室と事務室、4階に収蔵庫と講座室(1室)が新しく作られ、文芸館の機能が移転されました。展示室も明るく、広くなり、本年度の文芸館主催の講座も始まりました。

ぜひ一度、『浜松文芸館』にお立ち寄りください。

特別収蔵展



<展示室の様子>

## 『浜松の俳人たち 今も息づく先駆者たちの思い』開催中



『浜松文芸館』の収蔵対象者資料『浜松文芸十人の先駆者』の中で、俳人として紹介されている五人、「松島十湖」「加藤雪陽」「原田濱人」「相生垣瓜人」「百合山羽公」の書、短冊、書籍等を中心に展示しています。

彼らの業績は現在も引き継がれ、数多くの俳誌が浜松で発刊され、多くの人たちが俳句を楽しみ、学び続けています。本展をとおして、広く市民の皆様へ「浜松と俳句」の関わりを知っていただけたら幸いです。

なお、展示品の中には、「正岡子規」「小林一茶」「山頭火」など著名な俳人の短冊、武者小路実篤の直筆の掛け軸も展示しています。

## 文芸館主催の講座始まる！！ ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

平成27年度の講座が始まりました。最初の講座は、『文学講座(春)一雨月物語を読む』です。講師は元高校・大学教師の松平和久氏にお願いしました。

本年度は、「雨月物語」の中の「白峰」「菊花の約」「浅茅が宿」を読みます。今回は受講希望者が多く、抽選で30名に絞らせていただきました。

秋にも同じ内容の講座を計画しています。皆様のご参加をお待ちしています。

次の各講座についても、申し込み受付が始まります。

- |                   |   |                     |
|-------------------|---|---------------------|
| ○ 短歌入門講座(20名)     | } | 募集期間 4月20日~5月21日    |
| ○ 俳句入門講座(30名)     |   | お問い合わせは『浜松文芸館』      |
| ○ 声であらわす文学作品(15名) |   | TEL 053-453-3933 まで |



<文学講座の様子>

### 井上靖と浜松 10

#### 井上靖の「信康自刃」

「信康自刃」は、昭和28年8月の「別冊文藝春秋」三十五号に発表された。「あすなろ物語」がこの年の1月から6回にわたって「オール読物」に連載されているので、それに続く作品である。

天下人となった徳川家康にとっての最大の謎は、信長の命とはいえ、正室築山殿と嫡子信康を殺してしまったことである。天正7年（1579）8月29日、佐鳴湖湖畔の小藪で築山殿が殺害され、9月29日には信康が二俣城で切腹した事件である。この事件は多くの作家によって作品化され、多様な説が示されているが、井上靖は一般に流布している説をもとに、家康・信長・信康・徳姫・築山殿の思惑や心理に焦点を当てて書いている。

婚約から4年後の永禄10年（1567）5月、徳姫が岡崎に輿入れするところから物語は始まっている。互いの存在が必要不可欠の信長と家康であったが、この賭けは信長の方が負い目が大きかった。婚礼の夜、徳姫は義母となる築山殿に突如、肩の肉を思いきりつねり上げられる。元亀元年、家康は浜松城へ移ったが、築山殿を連れて行かなかった。

元服した信康は、初陣の足助城攻略を手始めに三方ヶ原・長篠の合戦ほかで目覚ましい働きを示し、武田勝頼をして「指揮進退の鋭さは、成長の後が思いやられる」と言わしめた。この話を伝え聞いた家康は驚くべき合戦巧者のわが子に対し正体不明の不安を感じた。

その後も家康は信康に滅びの予感を感じたが、信康自身は父以上に正体のわからぬ不吉な不安に悩まされた。それは、自分の体内に今川の血が流れているという意識からくるものであった。信康の予感通り、事態は悲劇的方向へ走り出す。

天正7年（1579）、徳姫が築山殿の不行跡と武田家との内通、夫信康の残虐行為など12か条の訴状を父の信長に送った。7月、家康は酒井忠次と奥平信昌を御馬進上の死者に立てた。信長は2人に12の罪状について問い質だした。信長は今川の血を引く俊敏鷹の如き信康を若い芽の内に積まねばならないと考えていた。徳姫からの訴状をこれ幸いと、二人を通じて信康と築山殿の生害を命じた。家康は息子と妻の弁護をしなかった。言っても無駄とわかっていたし、徳川家にとって築山殿と信康の存在は将来の禍根となることが明白であったからである。

8月3日、家康は岡崎城へ出向き、信康にいきさつを話し、大浜、遠州堀江、そして二俣城へと移動させた。浜松城へ向かった築山殿は8月29日城外で害せられ、翌日二俣城で信康は自刃、21歳の生涯を終えた。

作者は、自刃に立ち会った信康の家臣たちと徳姫のその後を簡潔に記して、小説を閉じている。

袋井の可睡斎には、家康が毎夜築山殿の亡霊に悩まされていたのを、当寺の等膳和尚らの祈祷で亡霊を無事退散させたという話が伝わっている。